

文安元年の六地藏幢について

竹原 明理

はじめに

平成28年熊本地震（以下、熊本地震）から2年が経過した。その間、熊本博物館のリニューアル工事は佳境に入り、やがてリニューアルオープンを迎える予定である。復旧過程が注目されている熊本城でも日々工事が進められている。

熊本地震では多くの文化財が被災したが、熊本城不開門近くに展示されていた文安元年（1444）の銘が入った六地藏幢（以下、本幢）【図1】も一部が落下し、破損するなどの被害が出た。本幢を管理する当館は、本幢の修復と当館敷地内への移設を実施した。本稿では、移設時の解体作業で明らかになったことを簡単ではあるが記録しておきたい。



【図1】文安元年の六地藏幢（熊本地震前）

1. 本幢に関するこれまでの調査報告

「六地藏幢」（「六地藏塔」とも表記）とは、側面に六道の思想に基づいた6体の地藏像が彫られ、道の辻などに建てられた供養塔であり、道行く人々の安全が祈願された。江戸中期に編纂された地誌『肥後國誌』にも本幢について短い記述があり、その存在が知られていたことがわかる。本幢の総高は約370cmに達し、上から宝珠・笠・龕部・中台・幢身・基礎の各部から成る。幢身には、「文安元年／甲子／十一月二十四日」「法妙仙／願主□□／妻女正妙」（蓮華台座）と刻まれている【図2】。県内に現存する六地藏幢の中で年号がわかるものとしては最古級とされる¹。熊本市教育委員会が昭和44年（1969）に発行した報告書では、本幢について以下のように記されている。

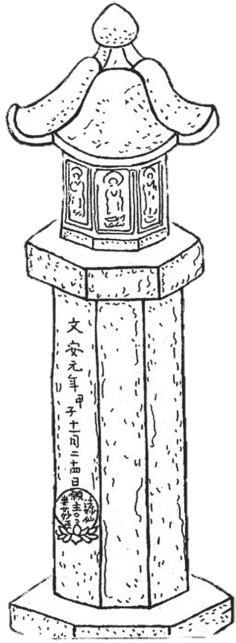
中尾加藤宮より本妙寺北側市営墓地に至る一帯を寺下と云い、現在道路は約4m高くなっているが、近年までは深い凹道で、この谷を四無礙谷と称し、西福寺なる寺院があったと伝えている。この凹道横に六地藏^{ママ}塔があったが、道路改修時熊本城内に移された。

石材は凝灰岩、六角形で基礎の一边57cm高45cm、幢身一边30～26cm高さ183cm、中台一边52～54cm、厚さ11cm、龕部は高さ約45cm、石幢総高約370cm。相対的に細長い感じである。幢身に右の銘がある²。又、この銘の上部にあたる龕部にも地藏像の下に□楽蒙□の4文字が刻されている³。本幢は保存良好、仏像も刻銘も明瞭で、代表的な六地藏石幢と云ってよい。[熊本市教育委員会 1969：34]

¹ 肥後金石研究会主宰の前川清一氏は、本幢について「県内の六地藏石幢のなかでの年号が明瞭に確認できるもののなかでは、最古であり貴重なものである」との見解を示している。[新熊本市史編纂委員会 1996：1205]

² 銘文は、本文中に記載した。

³ 今回の移設にあたっては、今後の安全性を考慮して、幢身と龕部の位置を調整した。



【図2】本幢の全体像

(熊本女子大学内郷土文化研究所(1952)より転載)

本幢は長らく本妙寺に程近い花園町中尾寺下地区(現在の熊本市西区花園4丁目付近)に安置されてきたが、道路改修工事により熊本城内の不開門付近に移された。旧所在地から城内に移設された正確な時期は不明だが、昭和27年(1952)の熊本女子大学郷土文化研究所による報告では、旧所在地での調査が行われており⁴、先述の熊本市教育委員会による報告(1969年刊行)では、すでに城内に移設されたことが記されているので、この間17年の内に移設が実施されたと考えられる。当館の記録には、本幢は当時の熊本市観光課から寄贈され、歴史資料として登録されたと記されている。以来、熊本地震が発生するまでの半世紀近く、本幢は不開門近くに所在し、城内を訪れる観光客の安全を見守ってきた。なお、不開門付近には、本幢のほかにも県内各地からの石造物が数点移設されている。

2. 熊本地震による本幢への影響

熊本地震で本幢は中台より上の龕部・笠・宝珠が落下した【図2】。宝珠と龕部に大きな損傷は見られ

なかったが、笠は大きく3分の1程度が割れる被害が出た【図3】。中台は落下することなく、幢身の下は一部欠損したものの、転倒することはなかった。県内の六地藏幢として最古級であることを示す幢身の銘文が損傷を受けなかったのは幸いであった。

熊本地震後、熊本城内は広範囲にわたって立入禁止区域となり、本幢が所在していた不開門付近も一般の立入りが出来なくなった。今後は石垣の復旧工事などが予定されているため、本幢も当分の間観覧に供することが出来なくなった。このため、貴重な文化財として本幢を修復し、改めて多くの人々の目にふれることができるよう、博物館の敷地内に屋外展示物として移設する運びとなった。



【図2】本幢の被害状況



【図3】笠の破損状況(奥に見えるのは落下した龕部)

⁴ 昭和27年(1952)に熊本女子大学郷土文化研究所が編纂した『肥後國古塔調査録』には、本幢の所在として「飽田郡花園村〔元中尾村〕字寺下貳百廿九番地」と記されている。

3. 本幢解体時の記録

本幢の移設にあたって各部位を解体したことにより、これまでではわからなかった各部位の構造が明らかとなった。特に各部位の柄や柄穴は、本幢を再び組立てると見えなくなってしまうため、可能な範囲で実測を行った（熊本市塚原歴史民俗資料館・清田純一氏が実施・作図）。また、幢身の銘文と龕部の地蔵像の拓本をとった（作成した実測図および拓本は本稿末に掲載）。

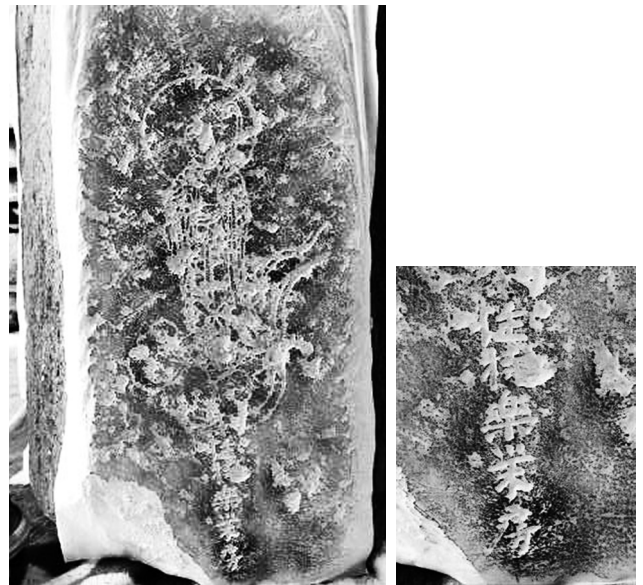
構造の詳細を本幢上部から見ていくと、まず、宝珠の下部には高さ約10cmの柄があり、笠上部の柄穴（深さ約12cm）に差し込まれる仕組みとなっている。笠下部の内側には、一辺約23cm、深さ約4cmの六角形の凹部があり、龕部の上部が嵌る構造である。龕部上部は平面で、鑿痕が残る。龕部下部には、直径約24.5cm、深さ約10cmの円形の凹部があり、中台上部の凸部（高さ約4cm）と噛むようになっている。中台下部には、一辺約30cm、深さ約1cmの六角形の凹部、この中にさらに直径約18cm、深さ約3cmの凹部があり、幢身最上部の直径約12cm、高さ約1cmの凸部と接地する。幢身の下部には、直径約26cm、高さ約18cmの柄があり、基礎の柄穴（直径約35cm、深さ約28cm）に差し込めるようになっている【図4】。基礎の柄穴は幢身の柄よりも一回り大きい。解体時には、基礎の柄穴に厚さ約3cm程度の土が入っており⁵、幢身の柄には赤土が付着していた。組立時の緩みを軽減するものとも考えられるが、詳細は不明である。



【図4】 幢身下部の柄と基礎の柄穴（解体時）

本幢は基本的に各部六角形で構成されているが、一辺毎の長さはまばらで、正確な六角形ではない。しかしながら、当時の石彫技術の高さを伝えるものである。幢身には、所々小石大ほどの穴が穿たれており、意図的に削られたものと考えられる。

六角形の龕部側面には各面地蔵像が線刻されている。風化が進んでおり、現在ははっきりと像を確認できるのは3面ほどだが、その他の面でも線刻の痕跡を確認することができる。中でも、今回拓本をとった際、幢身銘文の上部にあたる龕部の地蔵像下には、これまで4文字とされていたが、「住□楽榮房」（□は「持」か）の5文字が新たに確認された【図5】。



【図5】 龕部（一面）の拓本

おわりに

本幢は笠の修復後、当館敷地内のSL付近に移設が完了した。当館のリニューアルオープンに合わせて、屋外展示物として改めて多くの人の目にふれる予定である。2度にわたって所在地を変えた本幢にとって、当館の敷地が永住の地となり、今後も当館を訪れる来館者の安全を見守ってくれるようお願いばかりである。

〔謝辞〕

本幢の修復・移設にあたっては、熊本城総合事務

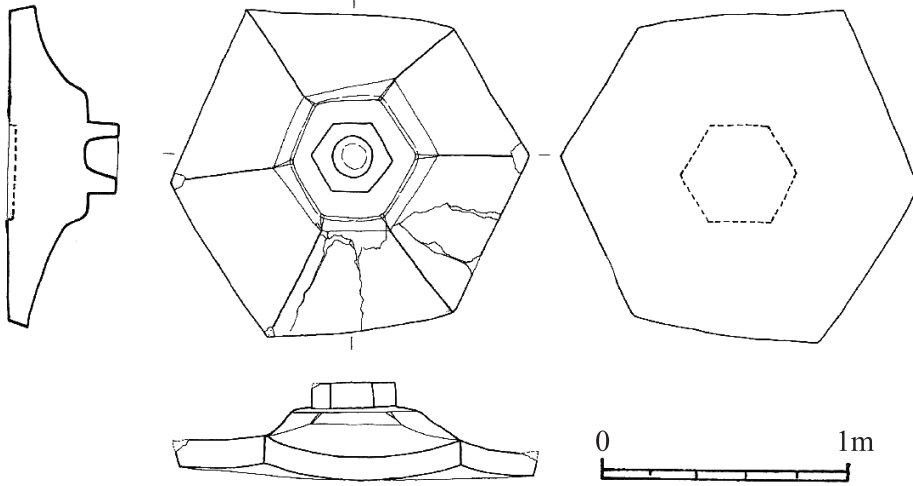
⁵ 土には、石や10円玉（1枚）が混ざっていた。旧所在地から城内への移設時に入れられたものと考えられる。

所、熊本城調査研究センター、熊本市文化振興課、株式会社橋口石彫工業の協力を得た。修復方針等については、肥後金石研究会主宰の前川清一氏にご指導いただいた。また、本幢の実測は、熊本市塚原歴史民俗資料館の清田純一氏に実施していただいた。末筆ながら、ここに感謝申し上げます。

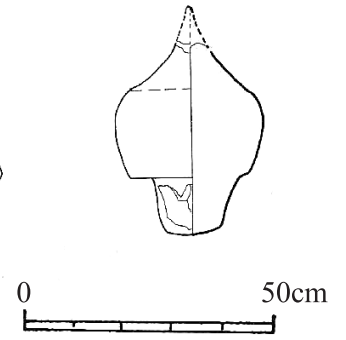
<参考文献>

- 熊本市教育委員会 1969 『熊本市西山地区文化財調査報告書 附櫛崎山古墳緊急調査報告』
- 熊本女子大学内郷土文化研究所編纂 1952 『熊本縣史料集成 第五集 肥後國古塔調査録』
日本談義社
- 新熊本市史編纂委員会 1996 『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』 熊本市

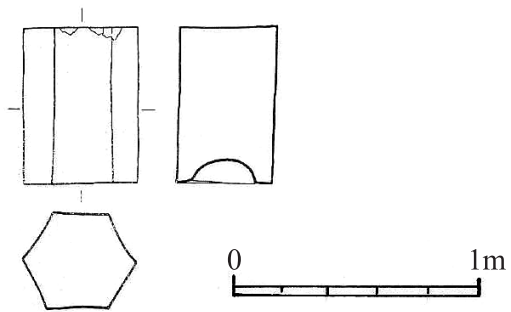
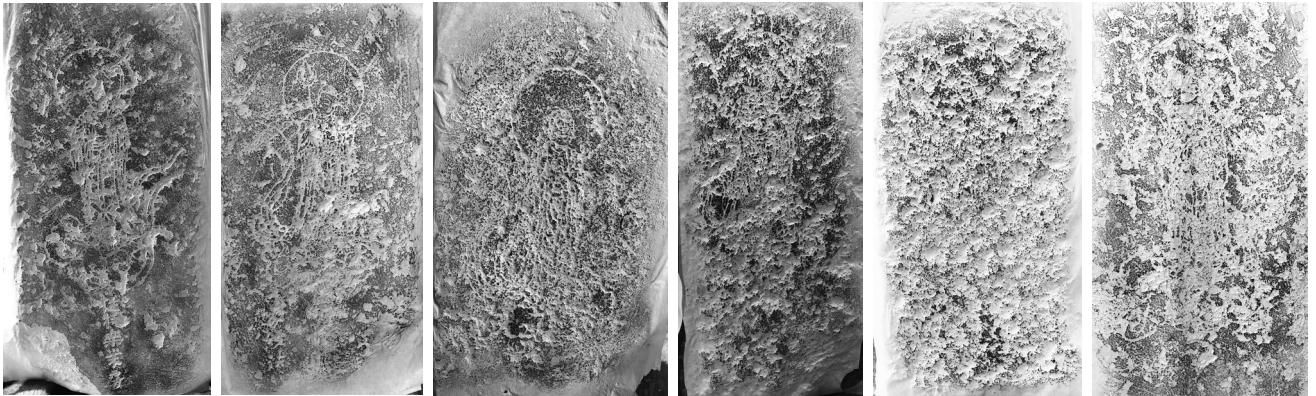
【笠】



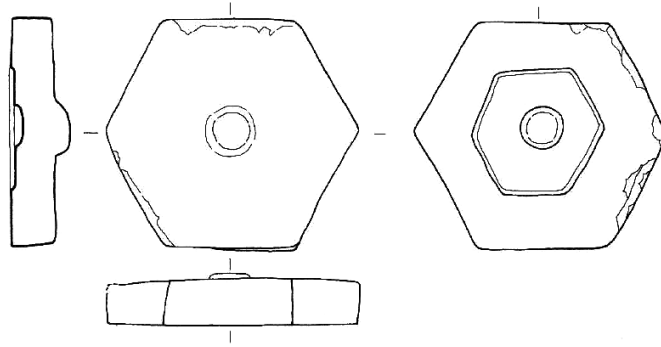
【宝珠】



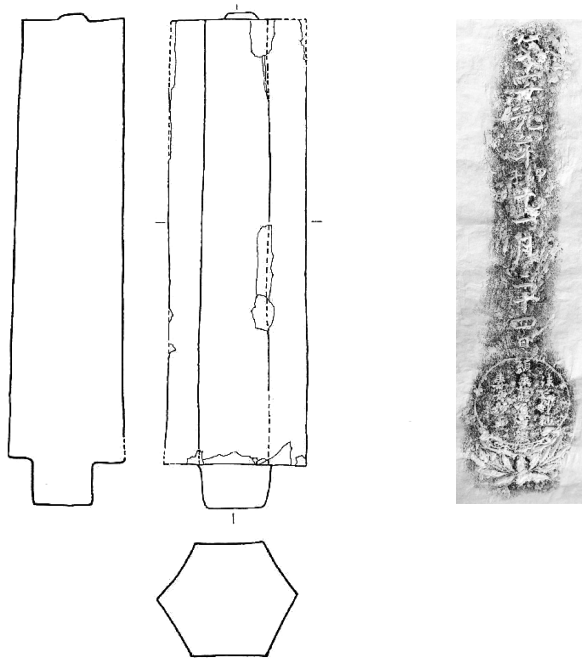
【龕部】



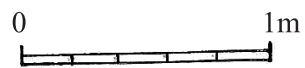
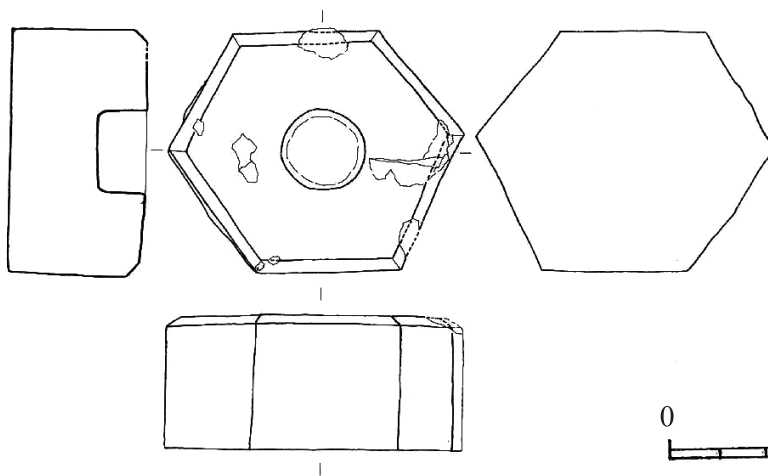
【中台】



【幢身】



【基礎】



熊本市塚原歴史民俗資料館 清田純一 作成